文京区アカデミー推進計画策定協議会
第２回文化芸術分科会

日時：平成２２年５月１９日
午後６：３０～８：３０
場所：文京シビックセンター２１階　２１０１会議室

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

文京区アカデミー推進計画策定協議会第２回文化芸術分科会会議録

（敬称略）

「出席委員」

座　長	水越 伸
委　員	内野 篤
委　員	長尾 栄一
委　員	中川 澄子
委　員	楢崎 華祥
委　員	笠井 美香
委　員	柳澤 愈
委　員	八木 茂

「事務局」

アカデミー推進部アカデミー推進課	八木 茂
アカデミー推進部アカデミー推進課	林　文昭
アカデミー推進部アカデミー推進課	佐藤 祐司
株式会社富士通総研	稲永 和年
株式会社富士通総研	瀬戸 香織

○水越座長：それでは雨の中、皆さん、お集まりいただきましてありがとうございます。第２回の推進計画策定協議会、文化芸術の分科会を始めたいと思います。まず事務局のほうから出欠と、それから資料について確認していただければと思います。

○事務局：事務局から説明をさせていただきます。本日は、中川委員から、ご都合によりご欠席ということでご連絡をいただいています。楢崎委員からは、まだご連絡はいただいておりませんので、後ほどおいでになると思います。

お手元に配付した資料ですが、第２回文化芸術分科会の次第、クリップ止めの資料がお手元にありますでしょうか。事前にお送りした資料などお持ちでない方は、お申し出ください。配付資料の１点目が座席表、２点目がアカデミー推進計画策定協議会の「意見シート」です。以上です。

○水越座長：前回、文京区の方にお願いをしまして、アカデミー関連でやられているさまざまなコンサートだとかイベントなんか、文化芸術にかかわるチラシやポスターを持ってきていただきました。それを僕ら、２つのグループに分かれて、拝見をしながら、文京区で文化芸術っていうキーワードに関係するどういう活動がなされてるかっていうことをですね、付箋に書いて模造紙にはっていく。それをグルーピングするっていう活動をやりました。ＡグループとＢグループの２つに分かれてそれをやっていただきました。それが今、柳澤さんの後ろのほうの壁に、前回と同じように貼ってもらっております。

今日はですね、もういっぺんここに貼られてるものを素材にしながら、次のステップの考えを進めていきたいっていうふうに思うんですけれども。基本的にですね、今日、今、僕が文京区の方々と事前に考えていたのは、前半で、もういっぺんそのグループに分かれてもらってですね。模造紙の上で非常に密に付箋が貼られてるとこと、あんまり何も貼られてない粗なところがあるわけですね。それはいろいろな意味があるかと思うんですけれども、少しそこら辺を丁寧に見ながら、簡単に言うと、今、かなり充実してやられていることはやられてることで、ある意味でいいだろうと。で、足らないことが何なんだろうかってことをですね、この付箋のマッピングの中から見つけてく。そういう作業をまずやっていきたいと思います。

具体的に言うと、例えば密になってるところに、１つのキーワードでそれがくくれるようであればグループ化をするようなこと。それから粗なところですね。そこが、例えば「こういうものが本来あるべきなんじゃないの？ここには」っていうことをですね、見つけてくっていうようなことをやる。そういうことを前回同様、付箋や、あるいはマーカーを使ってですね、地図の穴埋めみたいなことをやりながら、文京区の施策といいますか計画として、今後やっていくべき課題っていうのをボトムアップでもって浮かび上がらせてこうってことをやってみたいと思います。

それをグループごとにやって、少し休憩を入れて、我々基本的に前回も今回も、そこまではですね、２つのグループに分かれてやってますから、それぞれのグループで何が課題かってことを、これは休憩の今のところは前っていうふうに思ってますけど、場合によれば後になるかもしれませんが、話をしていただいた上で、今度はその２つのグループで出てきた課題とかグルーピングみたいなものをつき合わせてですね、１つのものにまとめてこうということをしたいと思うんですね。恐らくそれが、我々が分科会として提案する「こういう方向での施策をしていくといいんじゃないか」ということの種になるような、そういうキーワードなり、あるいは文言になるんじゃないかなっていうふうに思ってます。

今日は最終的に文京区の方である意味で必要なといいますか、ここから出す最終的なキーワードとか文言までは行かないですね。ただ、「だいたいこんなものと、こんなものと、こんなものが大事だね」っていうことがですね、皆さんで合意ができて、出せれば、それをその次の次回に、もう少しきれいに体系化したり文書にしてくっていうことをするというようなことにしていきたいっていうふうに考えています。

前回ですね、私、この作業を始める時に、一応、分科会の座長としてですね、お願いをしたいということあって、１つはですね、例えばこの前、楢崎先生なり中川先生がいらっしゃいましたから、絵画とか、あるいは書道で例に挙げましたけど、もう書道が好きで書道教室に通ってるっ

ていう人は、ある意味でいいんだと思んうですね。いいって言うと変ですけど、それなりに文京区は充実したサービスもなさってる。ただ、書道を小学校・中学校の時やったけど、それ以来やってないよっていうような人、そういう人にいかにもういっぺん書道に来てもらうかとかですね、絵画っていっても非常に高尚な油絵だけを描くんじゃなくて、ちょっとしたデッサン画みたいなものをですね、「ハイキングがてら描きたいんだけど、でもそれ、どういう所に行けばいいのかわからないな」っていう人たちに来てもらうとか。要するに、関心があるんだけどなかなか区のイベントに来ない人、あるいは来たくない人、あるいは来る機会がない人。そういう、一見さんといいますか、ビギナーっていいますか、なんか潜在的な、お客さんって言うとちょっと何なんですけど、そういう人たちに、いかにこういう文化芸術の活動を知ってもらうかっていうことですね、考えましょうよっていうことを１つお願いをいたしました。

それからもう１つは、結構いろんな活動が文化芸術っていうのはあるわけですね。で、あんまりはじめから何っていうふう決めないで、例えば今、僕ちらっと口から言いましたけども、ハイキングがてらちょっと水彩画みたいのを描くっていうのは、それはやっぱり本格的な絵画じゃないから、芸術じゃないから駄目かっていうと、そういうことじゃないんじゃないかっていうふうに思うんですね。そういう意味で言うと、皆さんそれぞれ得意な分野とか、ご経験され、例えばミュージカルを経験されたとかっていうことがあるかと思うんですけど、ご自分のよくご存知なことを、ぜひ皆さんで分かち合っている。あるいはみんなを足しても足らないとこっていうのが多分あると思うんですね。そういうことについて、それこそが多分、模造紙の上で付箋がないとこっていうんですかね、粗なとこだと思うんですね。だから我々がカバーできる文化とか芸術っていうのはそんなに広くはなくて、区民みんなの人のために考えたらもっとほかにもあるかもしれないっていうことを、常に目配せしながら考えていきましょうっていうことだったでしょうかね。確かそういうようなことを、私、申し上げたかなっていうふうに思うんですけれども。

同じことをですね、なるべく多くの人に幅広く考えてもらえるような、広い曼荼羅のようなものを考えてみようと。それから、新しく入ってきてもらえる、これから何かをやってみたいと思う人のためにできるようなことを考えていきたいっていう。そういう２点をちょっと注意しながら、今回もやれればなっていうふうに思ってます。なかなかですね、自分が文化とか芸術だと思ってること以外のことを思いつけって言われても難しいと思うんですね。私なら私で何か考えがありますし、例えば笠井さんなら笠井さん、長尾さんなら長尾さんでおありで、やっぱりそれでお互いに話し合いながら、文殊の知恵を出し合いながらですね、やってってみたいなっていうふうに思います。

繰り返し言いますと、今もう既に、ある程度やられてること以外のものは何があるんだろうか。で、新しい人に来てもらう、あるいは来たくないと思ってる人、関係ないと思ってる人に来てもらうにはどうすればいいのかっていうようなことを少し念頭に置きながら、さきの模造紙に戻ってですね、少し考えていってみたいなってことを思います。

前回、私、今申し上げましたポイントを考えてきてくださいと、一応宿題を出しておいたものですから、今、やってきてる人、やってきてない人って言ってもしょうがないものだと思うので、今からの活動の中で、もうお考えの方はですね、それを出していただければと思いますし、そうでない方は、ここの場で考えていただければっていうふうに思います。

それから事務局のほうで今回、郵送で送ってもらった資料のほうですね、この中で、Ａグループ、Ｂグループで出てきたものが表にされております。これは非常にありがたい整理をしていただいたと思うんですけれども。前回、ここの壁に書いてあるものにですね、我々、丸をつけたんですね。丸がついてるのが何かっていうと、これは一般の人が参加してなんかやるようなものだったと思います、歴史散歩とか民謡とかですね。それに対して、例えば大学の先生の講座とかですね、それからクラシックの音楽とか、これは我々、観客としては参加するんですけど、自分らが別にやるわけじゃない、聴衆になったり観客になるようなタイプのものでした。それはどういう経緯でこういうふうに、なんとなくこういう分け方をしましたですね。それは恐らく私が「なるべく多くの人に来てもらうっていうようなことを考えて」ってなことだったんじゃないかと思いますけれど。

そしたらですね、今からですね、１時間とは申しません、30～40 分という感じですかね。前のグループに戻って、前の模造紙を見ながらですね、ゆっくり「前に何考えてみたんだろう」ということを思い出しつつ、足らないものが何か、それから、新しい人に来てもらうにはどうすればいいかっていうようなあたりをですね、また付箋に書いて貼ってみると。恐らくそれは余白に貼ったりするようなことになるかと思いますが、そういう作業をしていってみたいと思います。

○笠井委員：ちょっと疑問なのが、私がちょっと考えていた時は、すごくいろんな種類のものが出てたので、結構その余白が、余白について思い浮かんだ人っていらっしゃるのかなっていうふうに思って。ちょっと私が考えたのは、結構いろんなものがあるので、モノを増やすというよりも、何か形態を変えてやるとか、もしくは情報発信の仕方を変えるとか、そういったプロセスで新しい方を組み込んでいったらいいのかなというふうに思って。何を増やすっていうのは、なかなか。

○水越座長：それはおっしゃるとおりかもしれないですね。これ以外、例えばですけど「太極拳、柔道、サッカーがあるから相撲を増やせ」っていう話、ひょっとしたらあるかもしれませんけど、そうじゃなくて、見方を変えてどういうふうに人に来てもらうかっていうような話はありますよね。そうすると、例えばですが、Ｂグループの太極拳・柔道・サッカーってなってるとこに例えば１つ、くくりを入れて、それに対して、じゃあ新しい人にどう来てもらえばいいのかっていうようなことについて、何かアイデアなりキーワードなりを入れてくってことになるかもしれないですね。

お考えになっていただいたってことなんですけど、僕はこれを携帯で写真撮っといて、うちで「ウ～ン…」と思って。僕はいくつか穴もあるのかなっていう気はしたんですけど、ただ、おっしゃるように、見方を変えるっていう方向のほうがいい場合も確かにあるだろうっていう気がしますね。少しやっぱりグループに分かれてですね、「ウ～ン…」って考えてみましょうか。

○柳澤委員：出尽くしてますが、あとさっき言った企業ぐらいですよね。

○水越座長：それ、おっしゃったのは、１つあると思いますね、僕は。おっしゃった企業っていう話から、ちょっとさっき言っていただいたのは、旅館とかなんとか、また企業とちょっと違うような話になってきているところもあると思うので、そういうのを入れてってもらえればと思いますけれども、さしあたりちょっとそれを。多分、ものすごい数が入るとは思えません、これ。いくつか入れながら、でも新しい、例えばＢグループのほう、柳澤さんがおっしゃったかなと思いますけど、六義園とかなんとか全部まとめられましたよね。これをどうするっていう話ですよね。湯島天神、伝通院、三四郎池、なるほどそうだけど、これをじゃあどうすりゃいいのっていうのが、さっき笠井さんがおっしゃったようなことだと思いますけれども。少し話して、やはりグループに分かれてやってみたほうがいいんじゃないかと。

（作業中）

○水越座長：なかなか面白いような難しいようなところがあったんじゃないかと思いますけれども。とりあえずですね、それぞれのグループで出た話をですね、少しお知らせください。

Ａグループ

○内野委員：とりとめがないので、あれですよね。挙がったのを言うぐらいしかないんですけれども。粗の部分ですかね。向こうのグループでは出てたんですけども、建築物の活用とかですね、公園の活用。公園に関連して、これは同じようなものです、教育の場ですね、体育館の設備の活用。

○水越座長：公園の活用って、例えばどういう感じなんですか。

○内野委員：公園で何か野外コンサートをやったりとか、そういう場として利用。それと、みんなも見れるっていうんですかね、アピールになるんじゃないかということがありました。あと、今、花の五大まつりってやってますけれども、文京区で、なんかこういうようなことも取り込めるんじゃないかという話。あと、町のお祭り、花まつり以外にですね、町のお祭りとの連携を考えると、中高年男性、なかなか参加が少ない中高年男性を取り込めるんじゃないかという話があったりですね。あとこちらは、広告の仕方ですね。広告というか、イベントの、行事の予告。これは予告ばかりではなくて、参加した方の感想。これはよかったとか、ここはどうだったとか、そういうのも掲載するようなものがあったほうがいいんじゃないかということですね。あとケーブルテレビ。今も多少やってるんですけど、もっとさらにケーブルテレビを活用して、広告をもっとやれるんじゃないかということですね。あとはイベントの広告。これはちょっとどういう。これと同じですね。こういう具合で、このぐらいですかね。あまり具体的なところまでは行かなかったんですけど。

○水越座長：どっちかというと僕はこっちのほうにいたんですけど。１つは、ここにあるように、どっちかというと広報的な話ですよね。それから、建物とか公園とか、そういう場所を活用する。その心は、やってるのが見えるので、外でやってたりとかいうのはたぶん。そうするとみんなが「行ってみようか」って思うんじゃないかと。

○長尾委員：というか２つのものが合わせて。場所と、それからイベントとが合わせて行われる。

○水越座長：あと、お祭りのような場っていうのは、同窓生がいたり、年に一度だからってなことがあったりして、ある特定の趣味や関心以外の人も来るんじゃないかっていうのと。林さんなんかからも、なかなか広報は難しいと。つまり文化芸術だけじゃなくて、いろんなものがあるので、それを、例えば福祉のものもあれば、教育のこともあってとかになると、どれかだけをなかなか目立たせるっていうわけにもいかないですから、広報の仕方っていうのは、なかなか苦労するとこなので。

○事務局：あと、長尾先生からお話のあったのは、街にある小さな公園だと、あまり手入れが行き届かないような所もあると。そういう所も活用することで、公園の活性化も図れるんのではないかっていうような言葉もありました。赤で書いてある、イベントのこの場所っていうところについては、池袋駅周辺などは、人がものすごくたくさん通ると。ああいうような所があれば、広報としてはしやすいんじゃないかっていうようなこともあって、そういうメモが貼ってあります。町場のお祭りなんかだと、普段仕事などで町で活動することの少ないお父さんたちも、表に出てお祭りで一緒に騒いだりっていうようなことがあるので、やりようによっては中高年の男性も取り込みやすくなるんじゃないかっていうようなこともあって、お祭りなんてものが書いてあると。
　最初のほうに内野さんもおっしゃっておられましたけど、だいたい出てきてるものに粗なところ、密なところの片寄りがあまりなさそうに見えたので、どういうふうに広報するかとか、どういうふうに集客するかっていうようなところに重きを置いて話をしてたっていうところかと思います。

○柳澤委員：公園のとこなんて小さな子どもが多いから本当は、中国じゃないけど、太極拳なんかやったらいいんですね、みんな、どこでも。もったいないですよね、ずっと、誰もいないですから、人が。

○笠井委員：ラジオ体操とか、ないんですか。

○柳澤委員：ラジオ体操はやってる。ラジオ体操はかなり有名ですね、文京区は。

○水越座長：中国、台湾、韓国でもそうですけど、公園で本当に書道をやったりとか、書道のお稽古をつけたりとか。そうすると周りがこうのぞいてるんです。それ面白いですよね。

○柳澤委員：そうですよね。たまり場になりますからね。公園の活用っていいですね。

Ｂグループ
○柳澤委員：Ｂはですね、この黄色いのは足りないので書いたんですけども。１つは映画がなかったかなと。昔は文京区は映画館がいくつかあったんですが。それから、そういうことで昭和 20 年代、30 年代。江戸時代の話は随分出るんですが、都電時代ですね、20 年、30 年の文化というのはあんまり。この辺はもう懐かしいことになりますのでね。それから、企業文化ということで出版・印刷という例の話が出てきたんですけども。それから出てきたのは、やっぱり小中学生の参加というのが、すそ野の拡大ではひとつのポイントですねと。この辺、大事ですからね、今後。それから、その別には、在勤の人ですね。企業というのも書道部とか絵画部とかコーラス部とか、いろいろありますから、そういう企業のそういうグループも呼び出して参加させるのがいいんじゃないかと。

○水越座長：区の中に会社があってっていうことですね。

○柳澤委員：はい、そういう意味ですね。そっから出てきたのは、ひとつ『大文化祭』というのをですね、やったらどうかと。毎年１回じゃあとてもカネがないから４年に１回、大会を。で、そのやり方はですね、確かにコンサート大会なんてあるんですよ。一日やってるんですけど、朝の 10 時ごろから４時ごろまでずーっとグループがやってるんだけど、観客はこの関係者だけしか出てないんです。自分のコンサートの時だけしか来てないんですよ。恐らく民謡でもみんなそうだと思いますね。ところがこのコンサートの中で舞踊と民謡と、全部１つの会でずーっとこうやるわけですね。そうするとお祭りになりますから。そういうようなことをほかの、書道でも、会場いろいろありますけども、大学のとかいろいろ使ってですね、そういうことをやったらどうかと。
　で、ひとつは、それだけじゃあちょっとあれなので、そこに講座を併設しましてね、書道でしたら、書道っていうのはこういうような字がどうだと、いいんだという解説があった後、見ると。落語でも、落語の鑑賞はどうするかっていう講座があって、見にいくと。そういう、ただ展示して、やるとか、みんなが参加して歌ったり踊ったりするんじゃなくて、そういう勉強を兼ねたような大会にしたら。その代わり１日じゃなくて１週間とか 10 日とか、文化祭、１週間でやるわけですね。そんなことで、文化祭っていうのをちょっとひねって、通常のことじゃないような形で、なんかできないだろうかと。そんなことですね。

○笠井委員：あともう１つ、ちょっと要素として使えたらいいかなと思ったのが、大会といったところで、競争的な要素もちょっと盛り込んだらいいかなというふうに思っていて、

○長尾委員：コンクールね。

○笠井委員：はい、そうですね。コンクールで、例えば華道とかでも、どういったものが一番すてきだと思ったかっていうのを投票してもらうことによって、優勝しようというモチベーションにもなるし。そういった要素も持ち込むと、全体的な意識も高まるのかなっていうふうに思いました。

○柳澤委員：短歌や俳句でも誌上参加でやってんですよね。いろいろ区報で。だけどそれも大会

で、みんなで一堂に会してやったら。なかなか大変ですけどね。

○笠井委員：あと、この文化祭には企業を呼ぶっていうこともちょっと考えていて。そうすることによって、お金の面でも援助があるし、あと、集客の面でもすごくいいと思うんですよ。例えばブースを設けることにしたら、絶対その会社のブースを盛り上げないといけないっていうことで、その社員の人たちがたくさん来るはず。そうすると、その社員の人たちは、多分恐らくそんなに素通りはしないで、ほかのブースも見ると思うので、「ああ、じゃあちょっと会社帰りにこういうことって実はできるんだ」って思うきっかけにもなるかもしれないので、そういった点で企業を呼ぶのもいいかなっていうふうに思っています。で、多分、発表する場で小中学生の例えば何かの発表、例えば小学校３年生によるダンスとかを５分とかでも入れれば、その親も来るし、小学校の友達も来るかもしれないし、きょうだいも来るので、集客にもつながると思います。

○長尾委員：今のＡとＢは、一致する部分が、いくつかのものを合わせてやると言ってるんですね。コラボレーションだ。

○水越座長：それはおっしゃるとおりですね。

○笠井委員：さらにこうやると、文化祭をやるとしたら広報が必要じゃないですか。先ほどのＡグループでも出てたんですけど。そういったところも、区で考えるのもありだと思うんですけど、例えば尚美学園とか、メディアとか芸術を勉強してる人たちもいると思うので、そういう人たちにメインでやってもらって、で、こういった形のように区の方にサポートしてもらいながらやってもらったりとかすると、ちょっと区の人たちとのかかわりも出てくるし、実践する場があると、すごい学生にとっては助かると思うんですよ。そういった面でいいと思うし。

　あとは先ほどあちらのＡグループで出ていた、結果も報告するって書いてあった紙があったと思ったんですけれども、そういった点でも、例えば大学の新聞学部とか、そういったような学部の人たちに書いてもらうようにすれば、学生の方も来るし、それを「自分が書いたんだよ」っていうふうに周りの友達に配ることによって、じゃあ次回のお祭りには参加したいとか、そういったことの関心を持つきっかけにもなるかなと思うので、いろんな人の、

○柳澤委員：すそ野の拡大に役に立つってことなんですよ。

○水越座長：今おっしゃっていただいた、企業の社員の参加っていうのの、もう１つ並んで、大学。大学のいろんな人たちの参加っていうのも。東京大学は今、先生が、契約の先生みたいのも入れると 5,000 人います。事務方の職員の方が 3,500 人いて、１学年 3,500 人ぐらい学部生がいて、同じぐらい院生がいるはずなので、とても規模が大きいんですよね。みんな暗〜い顔して本郷に通ってるんですけど、やっぱりこういうので祭りとかに出てきた方がいいと思います。

○笠井委員：実践する場があると、すごくいいと思うんです。

○水越座長：東大で、いつまでたっても博士課程から出られないやつをどうすればいいかって、今、総長の下でいろいろ議論があって、「まず社会復帰させなくちゃいけないだろう。もう無理なんじゃないですか？」みたいな話をしてるから、こういう場所に来てもらった方がいいかもしれない。

○柳澤委員：東京大学っていうのは、これ、面積的にいうと１割ぐらいあるんですか？　文京区の１割ぐらい。これが穴ぼこになってるわけね。

○水越座長：自分で言うのもなんですけど、さっきもこっちで言ってたんですけど、ちょっと迷

惑だろうなと思って。さっきどなたかおっしゃいましたけど、あそこ横切ってなかなかあまり行けないっていうね。いつの間にか医学部の裏に出ちゃったり。

○柳澤委員：ポカッと穴開いちゃってね、ここ全然、区に貢献してないんですよね。貢献してないって言うと怒られちゃうけど。

○水越座長：ただ、さっきお話ししたんですけど、この５年弱の間、東大の中では学部生のボランティアで、修学旅行生とか絵画教室で来るような人を全部案内をしたりするようなことをやったり、僕なんかもやりますけど、修学旅行生に、いがぐり頭の中高生に講義を、模擬授業みたいなことをやったりとか。僕、今度、品川の小学生と京都の福知山の中学生にやるんですけど、なんで文京区の子たちにやんないのって感じですよね。あと文京区民に。

○柳澤委員：じゃあ修学旅行のコースの中で、東大の勉強って入ってるわけ？　向こうの企画の中に。

○水越座長：ある意味で入ってるんだけど、ものすごい数来るんです。

○柳澤委員：で、文京区は来ないわけ。

○水越座長：文京区からも来るとは思いますけど、ものすごい数来て、今、建物行くまでにもう、子どもたちの間を縫っていくような感じですから。ちょっとここでお休みしましょうか。

（休憩）

○水越座長：結構皆さんにちょっと難しいことをお願いしてて、僕自身がどうやればいいかわかってることをお願いしてるんじゃなくて、「なんかこんなのでやって」みたいな感じで、よくわからないとこも含めてお願いをしたんです。ただ、かなり面白い話が出てきていると思っていて。既に先ほど、やや無理に僕が中断を、休憩を入れましたけど、Ａのほうで出てきてる話とＢのほうで出てきてる話で、非常に同じことを別の言葉で言っていたり、お互いに補足し合ったりってなことが出てきてると思うんですね。で、繰り返し言うと、今日、これをすごくきれいな、なんか文言にまとめるっていうことではなくて、ある程度こんなような考えなりアイデアの固まりがあるなっていうことを、そこまで出せれば、次回にもう少し、ある種行政的な形にたたいてのばしていくみたいなことをするっていうことになると思ってます。

多分ここから先は少し、今もう既に自主的にというか、付箋をはっていただきましたけれども、少し付箋をお手伝いいただくような形で、まとめていきたいと思います。こういうとき大事なのは無理やりまとめないっていう。まとめたいって言いながら無理やりまとめないっていうのも矛盾してますけど、10 個のうち７つはきれいにまとまるんだけど、３つはまとまらないと。それを捨てちゃうともったいないんですよね。実はそれがすごく大事な種だったりするので、まとめたいんですけど、あんまりきれにまとめきらなくていいだろうというふうに思いつつ、２つがどうつながってるかっていうことを、ちょっと皆さんでお話をいただければいいんじゃないかなと思います。

さっき柳澤さんや長尾先生からお話がチラッと出まして、コラボレーションみたいな話が出ましたけど、文化祭とか祭りとか、そういう、ある具体的な場所で、人が来て、なんかをやる。そういうところに、出し物のような形で文化芸術的なものを出してみたり、それを見てもらうことで広報にしたりっていう、一石何鳥にもなるようなことをやるっていう、そういう仕掛けっていうのが、両方で出てきてる共通のとこじゃないかなと、ひとつ僕は思いましたね。

さっきこちらのほうで出てきた話は、おっしゃったあれですよね。池袋の西のね。なんていうんですかね、あのスペースは。

○長尾委員：西公園。

○水越座長：こっちでお祭りっていうときに、今おっしゃっていただいた話が結構あって、新橋の機関車の前なんかもそうなんだけど、池袋や新橋などで働いている、特にサラリーマンの人が、帰る時に「あそこら辺に寄ってくと、なんかやってるかもしれないな」と思って、で、そう思ってて、やってたら面白いしっていうような、そういう「なんかあるかもしれないから寄ってみよう」っていうような場所っていうのは意外と大事で、そこで誰かが何かをやってるのを見て、自分もやってみようってことが出てくるかもしれない。これが建物の中の一室っていうような感じになっちゃうと、なかなかお父さんたちは来られないよねっていうことを話してて。ただ一方で、林さんがおっしゃってましたけど、なかなか豊島区の池袋みたいな感じの所は、文京区にはないだろうと。「そこまで人がたくさん来る所はないですね」なんてなことも話してたんですけど。

○柳澤委員：ドームのとこぐらいかな。

○水越座長：そう。だからドームの周りだろうと。

○柳澤委員：礫川公園なんて、ど真ん中でいいんだけど、なかなかあそこに集まらない。雰囲気がね。

○八木委員：平場が少ないんですよね、段になってたりしてね。

○柳澤委員：そうですね、礫川公園のところは中心だけども、ドームのあそこのとこですね。

○笠井委員：でも東京ドームって、生活圏っていう感じじゃないですよね。

○水越座長：じゃないんです。だから池袋のそこじゃないんだよね。東京大学も東京ドームも、中、そう普通の人は通っていかないわけで、ましてや東京ドームの真ん中通ってうちに帰るわけじゃないですからね。でも理屈を言えば、文化芸術の源にはお祭りがあると思いますよ。お祭りっていうのは非常に、祭事でもあり奉納する場所でもあるわけですから。

○笠井委員：先生はすごいメディア出身だと思ったんですけど、その観点で広報活動とかで、こうしたらいいかっていう提案とかってありますか。

○水越座長：２つあって、１つは、僕はやっぱりお祭りは重要だと思いますね。さっきこっちでおっしゃってくださった文化祭なんかもそうなんですけど、さっき林さんが言ったように、区は区でいろいろな部署からパンフレットが出たりなんかしていると。それをバーッと置いとくと、それはそれで悪くないんですけど、晴れの場だとそういうのは結構楽しいんですよ。例えば千葉の房総に行ってですね、どっかのホテルに行くと、次の日の朝、メシ食ったらどこ行こうかなっていう時に、そこに必ずパンフレットが置いてあるわけですよ。そういうときは、自分は旅行だから楽しいから全部見るんですよ。だけど、晴れの場じゃなく褻（ケ）の時には、自分の関係あるやつだけしか見ないっていうふうになる。だから実は並べ方の、ただ並べ方の問題じゃなくて、人がどういう気持ちでいるかっていうことが重要なので。さっきチラッと言いましたけど、例えばテレビ局のホームページっていうのは、やたら細かい項目が並んでるんですよ。あれは理由ははっきりしてて、ニュースの人はニュースの広報をちゃんと出してほしいし、アナウンスの人はアナウンスのことを出してほしいし、芸能のことは…。全部出しちゃったら、バラバラのまんまなんですよね。

　だから広報は、実は並べ方のデザインには限界があるんですよ。今、もうある意味で十分やってらっしゃって、それをどういう意識で見るかってことが重要で、お祭りのように、非常に楽し

くそういうものを見られて、いちいち自分の趣味意外のものを見られるような、そういう場所が重要で。そういう意味でいうと、このフェスティバルっていうか、お祭りっていうのは僕、大事だと思いますけど。僕がやってるメディアの研究って、ものすごく幅が広いので。例えばうちの院生では「メディアとしての墓」っていう研究をやってる人がいるんです。お墓とか記念碑ってのは、どんなものよりも長く続くメディアなんですよ。掃苔っていう、お墓にお参りするような伝統についての江戸時代からの歴史をやってるような人がいるんですけど。僕、すごく幅広くメディアを考えてるんですけど、１つはやっぱりお祭りのような場を設けるっていうのは、すごく重要だなと。

もう１つは、東大で、同じことなんですけど、僕は東大のホームページをどうつくるかっていうのを一時やらされて、やめたんですけれども、同じなんですよ、テレビ局と。文学部も言いたい、法学部も言いたい、あれも言いたい、クッチャクチャになっちゃうわけですよ。

○柳澤委員：そしたら言わないことと一緒になっちゃうわけ？

○水越座長：全くそうなんです。クッチャクチャで、言わないことと一緒なんですよ。だから号令かけて「きれいにしよう」っていうのに、医学部は医学部のをやってくれと言う。で、結局、全体をきれいに統一しようとすると、ものすごいお金がかかるんだけど、すぐさまみんな変えてっちゃうんです。だからどうするかっていうと、EU 方式っていうか、それぞれのところはそれぞれ勝手にある程度のことやれと。その代わりトップページは、これは本部の管轄だから、きれいな表紙にしとくよと。その代わり、そっから入ってったら、それぞれ自由にやってくださいっていうことなんですよ。つまりこういう活動も、例えば書道をやってらっしゃる方とか演劇が好きな方が、それぞれ自分たちである程度広報について、市民の方が参加するような形で、自分たちである程度つくってく。そういうのを、全体の側の部分は区がちゃんとやるっていうふうにしとくっていうのかな。そういうふうにすると、すごく好きな人がつくったものは見やすい場合が多いですから、全体をきれいに頭っから全部を統一しようとすると、とても成り立たないっていうことがあるなと思います。

○柳澤委員：確かに文化祭実行委員とか推進委員というので大きなことになると、何百人が参加するから、その分だけ能力が増えますわね、人材の、これやりますとね。

○水越座長：そうですね。だからある種、強力に中央で誰かが管轄しなくちゃいけないんだけど、全部を管轄しないと。だからある大学でいうと、学部の話は本部はかかわらないと。その代わり全体のことになったらグチャグチャ言うなよってことになる。東京大学は本部が強くないですから。あそこは幕藩体制みたいなところがあって、医学部は自分が世界の中心でいると思ってますし、理学部も中心でいると思ってるので、非常に弱い江戸幕府みたいな。ですから最近、ちょっと中央をある程度強くしようって話が出てる。ただ、あんまり強くしすぎると、今度は理事長とか学長の、「うんうん」って言わないと何も動かないような大学みたいなことになっちゃうと、これはまた違うことになると思って。

だからホームページとか携帯っていうのは使いようなんですけど、最終的なところは、ホームページをどんなきれいにデザインしようが何しようが、人間の問題なんですよ。だからそれにどういうつもりでいくのかって。うきうきした気分で行けるような雰囲気をつくらないと駄目なので、場のデザインっていうのが非常に重要なので、それでお祭りっていう話。さっき長尾先生がおっしゃったコラボレーションみたいのが大事かなっていうふうに思ってます。

○長尾委員：ただ、そのコラボレーションも、誰がやるかですよね。誰がいつやるか。

○水越座長：あちこちであっていいんじゃないですかね。その代わり４年に１度あるっていうのは悪くないね。

○笠井委員：私が考えたのは、話題性とかも大切かなって思ったので、規模をすごく大きくして。多分、町単位のお祭りってすごくよくあると思うんですけど、区の祭りっていうのはないと思うので、思いっきり大きく区全体でやって、例えばお祭りの規模１位になるとか、そういったものがあってもいいと思うし。あとは同じ日に全部やったほうが、やっぱり集客率っていう意味ではすごく多くなると思うので、そういうのはあってもいいのかなって。

○水越座長：僕はあってもいいと思うんですね。だからオリンピックが、さっきおっしゃった、あって、アイスホッケーはアイスホッケーで大会があるっていうね。アイスホッケーの大会もあっていいわけですから。でも会社対抗は面白いかもしれないですね。だって東大は全く駄目ですから、東京六大学とか、東大と京大でヨットとか、なんでも弱いんですけど、レガッタとかね。だからそういう、相手がいるから自分も頑張ろうと思うし、毎年いつ集まれるっていうことはすごく重要。区内にある同業他社の囲碁部で戦うとか。

○長尾委員：東大のコンサートっていいですよ。上手ですよ。

○柳澤委員：文化祭、やるとなったら大変ですね、しかしね。終わったらすぐ準備しなきゃいかんしね。毎年毎年、いろんなこと全部やってるんですよね、大会はね、毎年ね、関係者だけがやって。

○水越座長：あまりすごく、プラスアルファで業者に入ってもらってものすごい派手なことをやるっていうよりも、それぞれが４年にいっぺんやるものをもってきて一堂に会するみたいなほうがいいと思います。さっきチラッと合唱コンサートで、やっぱり自分のところだけ聴いて帰ってくっていうのがあって。

○柳澤委員：それでも、それはそれなりに全員参加だから値打ちはあるんですけどね。

○長尾委員：意味はないわけじゃないけどね。

○水越座長：どうでもいい話なんですけど、大正末期っていうか昭和初期に日本でラジオが出てきた時に、僕はそういう研究してたんですけど、ラジオが出てきて、初めて小唄の人が清元（三味線音楽のひとつ）聴くってなことになったんです。全部別々でやってたから、ラジオで番組で流されたら「はー、こんなうたい方なんだな」とか「三味線、こうやって使うんだ」ってことがお互いにわかって、

○柳澤委員：没交渉だったんですね。

○水越座長：没交渉だった。だからプロレスでいうと、空手とプロレスとかなんかが一堂に会するようなもので、「ああ、突きはやっぱり相撲だわ」とか、そういうふうに思ってっていうのがあって。やっぱり一堂に会して自分の知らないところを見るって、ものすごく大事ですよね。

○八木委員：それをさっきおっしゃってたんですね。例えば華道とか絵画とか書道とかお茶も連続的にやれば面白い。

○水越座長：僕はそれを聞いた時、それを思い出した。あと、僕が今いる情報学環ってところは、新入生に最初２週間ぐらいは、僕らは 20 分ぐらいずつ、自分らの自己紹介と講義をするんです。僕らのとこはコンピューターのことをやってる人、ロボットのことをやってる人、僕みたいにメディアのことをやってる人、歴史のことをやってる人、いろいろいて、全部聞かなくちゃいけないんです。大学院に来るような人間は、例えば歴史だったら歴史だけやりたいじゃないですか。

だけどロボットの話も聞かなくちゃいけないんです。僕らの学部はそういうとこですから。で、必ず全部を聞けと。そうすると意外と、ロボットの話を聞いてて面白いことに気がついたりとかっていうことがあって、これと全く同じなんですよ。

○長尾委員：ヒントがあるんですよね。

○柳澤委員：専門ばかにならないわけですね。

○水越座長：ならない。

○笠井委員：あと、思いつきばかりですいません。例えばコンサートとかミュージカルの合い間合い間に小学生が発表する場を設けるんですけど、それが１年生、２年生じゃなくて、縦割りで、Ａ組全体で１年生から６年生までいるっていうのを、合い間合い間に入れてくことによって、同級生とかクラスメートが出てれば残るじゃないですか。それを項目の間に入れていくことによって、その間で、「どうせ 30 分後に戻ってくるんだったら、ここでほかのやつも聴こうかな」って思うきっかけになると思うので。そうすると、自分のだけ出て帰るってことが防げるんじゃないかなって思いました。

○水越座長：それはありますよね。

○笠井委員：そういう仕組みづくりもあるかなと思いました。

○水越座長：異年齢の人を混ぜたほうが、絶対にいろんな意味で面白いですね。

○笠井委員：そうですね。そうすると、今、言われてるような、あまり上下の関係がつくれないっていったことも対策としてできるし、区が取り組めば、そういう教育にも力を入れてるっていうことにもつながっていくと思うし。

○柳澤委員：小学・中学生を参加させてもいいですわな、お祭りに、土日を入れれば。

○水越座長：このはじめにある小中学生の参加っていうのは、例えば今おっしゃったようなことですよね。

○柳澤委員：はじめは書道とかいろんなことにと思ってたんですね。そういう、大事だと。

○水越座長：学校単位とか、いろいろ地域では、小中学生、いろいろやってますよね。

○八木委員：そうですね。ただ、小中学生って出たのは、古典芸能を、我々もあまり知らない分野だったりするので、それって最初は、もっと小さい時から触れるチャンスがあるといいんではないかなという、そういう意味でもあったかなと思いますけどね。

○水越座長：あとは多分、例えば、書道の先生がいらっしゃるからあれですけど、学校でやるお習字と、やっぱり本当の書道を目の前で書いてらっしゃるのを見るのでは、全然違うだろうなと思うんですよね。

○楢崎委員：中には、学校の先生方で書道を本式にできない方もいるわけですね。ですから地域の中にいる人たちがそういうところに行って、指導したらいいと思うんですよ。人材バンクをつくっておくと、先生も助かると思う。やっぱり本当の作家としてのプロの人と、そうではなく、

趣味の方とかいろいろいますから、その場その場で考えたらよいと思います。

○水越座長：先生がおっしゃるように、学校の先生から書道習うとイヤになるっていう人、結構いるんじゃないかと思うので。

○楢崎委員：そうでしょ。

○水越座長：正しい字を書かなくちゃいけない、みたいな感じになっちゃいますね。

○楢崎委員：だから学校の書写は、余り面白くないわけですよね。止めなければいけない、はねなきゃいけない、こっちが長いだ短い、あれじゃかわいそうですよ。ところがそれが書き方では大切なことで、それでないと点が取れない。その辺が悩みの種です。

○柳澤委員：教科にしちゃうから、そうなっちゃうわけね。

○楢崎委員：高校になって、はじめて規約から解き離される。

○水越座長：自由になるんだ。でもその時は、もうやらないヤツがいっぱい出てきちゃっている。

○楢崎委員：硬くなって、小中の書写教育で洗脳され、書としての美意識がなくなってきている。だからそこを壊すのが大変。小さい時から、伝統芸術としての書の美しさをというものを、見ていてくれるとうれしいと思うんですけど。

○水越座長：それはやっぱりこういう場所で実際に先生がおやりになったり、あるいはそういうことで、「ああ、よかったな」と。「あのなんとかバンクへ行ったらそういう先生がいるらしいから、来てもらおう」っていうのがあると、いいですよね。

○楢崎委員：ええ、それが欲しいですね。

○水越座長：多分、絵でも似たようなことが、

○楢崎委員：同じだと思いますね。

○水越座長：音楽でも同じかもしれないですね。

○楢崎委員：学童保育っていうのは、あれはどうなってますか。私はあまり知らないけども、放課後、小中の生徒なんかが使う。

○事務局：文京区の場合、保護者の方が家にいないからという理由じゃなくて、放課後遊びに行く児童館っていう施設と、いわゆる、今、先生がおっしゃった、学童保育をやる育成室っていうのが２つあります。学童保育っていうところは小学校３年生まで。小学校の１年生から３年生まで。児童館は幼児～高校生までが登録して利用する施設です。

○長尾委員：そういうところと結びつきというか、それとなんかほかのものと結びつけるという、

○水越座長：さっき笠井さんがおっしゃったのは、例えば学童が一番近いですよね。

○柳澤委員：文化祭に参加させるってことですよね。

○長尾委員：とかくそういう時になんかやるときに、お行儀をやっぱり教えたほうがいいですね、さっきの話じゃないけれど、お行儀よくやる。人が音楽をやってればちゃんとそれを聴かなきゃいけないと。

○柳澤委員：小笠原流入門なんてあって、普通に教えるんじゃなくて、親子。親もできないので、親子を教えると、親のほうが一生懸命やってて、子どもはそれを見て一生懸命やると。そういうような話がありましてね、その対象、小笠原流入門を、ある年層の人がやるんじゃなくて、親子教室にしたらどうだって話があるんですよ。そうすると、親も勉強してると、子どももそれを見て、親と子どもの間の対話も一体感もできるんですね。お茶やなんかでもそうですけどね。

○水越座長：そうですね、お行儀って先生、そういうものですよ、やっぱり。親がだいたい…。親がコンサートで自分の子どもが出てるとこだけ見てて、帰ってったら、子どもは同じことをしますから、絶対ほかのとこを見ないですよね。だから子どもが悪いのは、だいたいそういうあれなので。そういう意味で言うと、このお祭りは楽しくていいんだけど、そういう意味合いはあるかもしれないですね。

○楢崎委員：書道ではお行儀はとっても厳しいですから。親子で学ぶと、共によい結果になりますね。

○柳澤委員：いい姿勢じゃないと書けないから。

○楢崎委員：そうですね。例えばおけいこに行って、靴をそろえて脱ぐっていうことも知らないで、脱ぎ散らかして入ってきますからね。よい躾が出来ます。

○長尾委員：今、親子参加でやってるのは理科の実験ですね、文京区は。

○水越座長：Ａグループでいうと広報っていう話と、場所、イベントっていう話は、ある意味で全部中心に、非常にシンボルみたいな感じで文化祭とかお祭りみたいなことが広報に結びつくし、場所やイベントっていう話に結びつくようなことになってます。そこら辺の話は今ある程度して、それがどのぐらいできるかどうかっていうことはありますけど、こちらで出てきた企業の方の参加とか、あと僕がさっき補足的に言いましたけど大学、で、小中学校。小中学校は若干意味が違うかなと。学童等々ですごく大事だと思うんですけど、そこら辺はどうですか？先ほどおっしゃっていただいた、非常に大事なことだと思いますけどね。だいたい文京区で働いている人が文京区で何するかっていったら、飲んで帰るとか、そんなような話になるぐらいで終わりですよね。
　僕がいる東京大学に関していえば、この３～４年の間に社会連携ということをすごく言い始めて、「最も地域と連携してない大学だよね」っていう自覚を持ってますよね、はっきり言って。で、「なんとかしなくちゃ」っていうようなことを言って、それこそ八木さんのところにこういう話が来たりとか。それから片っぽで、東大から人が外の文京区のほうに出てくるっていう話と、本郷のキャンパスに人に来てもらうっていう、両方ちゃんとやりましょうっていうようなことは、始めてはいるんですけど、さっきの企業の方々が地域のいろんなことに参加するっていうような意味でのことまでは、まだいってないですね。「薬学の先生が薬の飲み方について区民に教えましょう」みたいな、こういう話はありますけど、区で生活してる、あるいは仕事してる者として区の人たちと一緒にっていう、そこまではまだ話が出てない感じはしますね。

○八木委員：産学共同とかいうことは、どうしても、東大ですので。

○水越座長：あります。大学っていうのは、だいたい産学共同から始めるんですよ。お金もうけのことから始めて。これまでずっとまじめ一徹だった研究室の先生がいきなり特許取っちゃって、

えらい羽振りがよくなったりするっていう話はありますけど、社会と連携するっていうのは産学連携も重要なんですけど、それ以外もあるわけですよ、社学連携っていうのかな。一般の市民と連携するっていう話があった上で企業との連携っていうのがない…、大学との連携がないと、企業と連携するだけが社会と連携するものだっていうふうに思っちゃうと、ちょっと違うだろうなっていうふうに。

○八木委員：文京区に、大学は今 18 あるんですね。国際仏教学大学院大学と日本社会事業大学の文京キャンパスもでき昨年に比べて新たに２つ増えました。ですから文京区の特色って、本当に大学が多いっていう街なんですよ。だからそのよさをやはり私たちも生かしていきたいですし、それだけの学生さんが文京の場所で、思い出の場所ということで２年間なり４年間なり過ごしていただく間に、ただ来て帰るだけではない思い出もつくっていただきたいし、「ああ、学生時代に過ごした所だったな」って、また振り返ってきてもらってもいいですし。それから留学生なんかの方は国を代表して来ていらっしゃる方も大勢いらっしゃると、その国の将来を背負う方が、若いころは文京区で学んだということにもなるから、そう考えると本当にいろんな人が実は通過してる街だろうなと思うんですね。だからそこは、あまり私から言うのもなんですけど、行政もそれほどうまく活用と言ってはいけないかもしれないですけど、そういうのをうまく活かしていないのも反省ですし。それから大企業の方とも、こういう会議を持ってることはないんですよね。文化の部分で企業と会議を持つってことはなくて、産業振興の部分では、もちろんありますけどもね。ですからその辺でいろいろなことを、こういうことを機会に少しずつ進めなきゃいけないと思うんですね。

○柳澤委員：東大も大きいですけど、大塚地区っていうのも拓大、跡見とかお茶の水とか、都内でもめずらしいですよ、あんだけの中学校、高等学校、大学が多いし。

○水越座長：面積的にも取ってますからね、なんかやってもらいましょう。

○柳澤委員：大塚文教地区ってのは、やっぱり都内でも有数ですよね。いろんな学校が入ってるから大したもんですよね。

○水越座長：さっきお２人がおっしゃったと思いますけど、例えばですけど、保育のことをやってる所で何かの形で保育のことをやるとか。一番地域貢献ということで大学で多分やるのは、例えば芸大とか多摩美とか武蔵美みたいに、芸術系の所が子どもたちとワークショップをやって何かをやるとか、木の葉っぱを集めて何かをつくってみるとか、そういうのもやるわけです。なんか最も東大が苦手そうな感じのことなんですけど、僕はそういうのを自分でやってるほうなんですけれども、やはり大学の学生、東大でさえが「タフな東大生を育てる」って言い始めて。学生の前に先生だろって話があるんですけど。やっぱり社会と連携をしたり、やっぱり違うタイプの人と交わってコミュニケーションができるようなことがないと、大学で勉強するだけじゃ駄目だっていうことがすごく言われてますので、今。それは多分、東洋大でも拓殖でも同じようなことがあるはずで。だから地域の中でいろいろなことを企業の人と一緒に学んでいくってことをやるっていうのが大学の売りになるっていうのは、これはどこでも大きな流れですから、それの文化芸術的なものっていうのは、いろいろ生かしていかれるといいと思います。

ただ問題は、前にも林さんとかともお話ししてたのなんか、多いじゃないですか、学校が。この学校が全部同じ企業組織じゃないわけですから、大学が。そうすると一対多対応になるっていうか、文京区は１個なんだけど、東大があって、なんとかがあってって、山のようにこうなって、全部それぞれの事情で言うっていうことがあって、多分大変だろうなと。ちょっと連合を組んでくれって感じですよね。

○八木委員：ある分野は、ある大学が音頭取っていくということになると、すごくはかどるかな

と思います。どうにもないのは、じゃあ行政のほうでやりますとかね、いうのもあるかもしれないですね。

○水越座長：確かにこんだけ学校、大学といわず高校でもそうですけど、多いと、やっぱりその方々にいろいろ関係してもらう。企業ももちろんそうなんですけど、企業と同じようにっていうのは、やっぱりかなり特色として考えていい。で、安上がりになるかしれない。

○長尾委員：事実ですけど、東邦音大っていうのがですね、シビックの昼休みの音楽をやったりとかやってますね。

○八木委員：月に１回、尚美ミュージックカレッジと交替で。

○長尾委員：それから講座で、今、私行ってるんですけど、リコーダーの講座を８回、6,400 円でやってるとか。それから日本女子大の歴史、日本史が護国寺研究をしてます。護国寺の中で、去年でしたね、その時は女子大の先生が解説をなさってらっしゃいました。

○柳澤委員：インタープリターでやったやつですね。

○長尾委員：行政から「今年はあなたの大学では、なんかやってくれませんか？」っていう呼びかけをして、その中から選んでやるとか。

○八木委員：既に「区民の方も聴いていいですから」って言ってくださる大学があるんですよね。講座を、聴講分を分けていただくとかですね。

○長尾委員：公開講座をやってもらったらどうかな。

○八木委員：公開講座ですけどね。だからいろんなやり方はあると思ってます。実際、能なんかですと、大学の能クラブも区の催し物にもう参加してもらっています。発表会では、区民の方と一緒に学生さんも、出演します。

○内野委員：能クラブですか、すごいですね。

○柳澤委員：大名屋敷の跡がみんな学校になってるから。

○水越座長：そうですね、大名屋敷の跡がね。やっぱり文京区の特色の大きな１つですよね。

○笠井委員：じゃあオープンキャンパスを一堂に、１週間のうちにほとんどの大学でやってもらって、遠方から来てもらうことも考慮して、旅館街をちょっと再復帰みたいな感じにして、その文化祭１週間のあいだ、ちょっとキャンペーンをするとか。そういうコラボレーションがあったらとてもいいかもしれない。

○水越座長：大学の先生が講演をして、それに来てもらうとか、区でお話をするっていうのは、これは結構あるんですよ。だけど英語で言うとコミュニティーコラボレーションというか、地域の中のちょっと講演みたいなものをもういっぺん活性化させるとか、さっきおっしゃった、ウェブサイトは、ホームページは大学の人間がきちんと区の管轄の下でつくるとかですね。要するに大学でやってることを皆さんにわかりやすく教えるっていう話はあって全然いいんだけど、そのもう一歩次。大学が地域でいろいろな活動をやって、その活動をやることで学生が学ぶっていうようなことをやるっていうのがあちこちで出てきていますので。恐らく旧帝大で言うと東北大学

が非常に進んでるんですね。それから大阪大学と。

○八木委員：携帯ゲーム機ではやった、健康のことでやってらっしゃる先生がいらっしゃいますよね。

○水越座長：そういうのはやっぱりやってますよ。だからもう一歩、大学の人間として言うと、大学の知恵を地元に引きずり出してくる。それが別に大学にとってもいいことなんですよ。そういうことっていうのが出てきてますね。大阪大学なんかは、すべての大学院生が、非専門家の一般市民にモノを教えるっていうプログラムも導入してるんです。阪大っていうのは大阪大学、白い巨塔の舞台ですけど、あそこのドクターになる人はみんな、一般市民に対して薬のこととかなんとかを教えるっていうことを、ちゃんとやれるような授業を受けないと駄目だっていうことです。

○八木委員：患者さんは素人さんであると。その人に説明ができないといけない。

○水越座長：今、あそこの総長は哲学の人なんですけど、文学部の哲学科の人はみんな阪急の梅田駅で、いきなりスチールいすを置いてですね、哲学の議論を始める。そういうことをやらされたりとかしてますけどね。そうすると周りのおばちゃんが寄ってきて、「どうもこの人、旗色が悪いな」みたいな感じで見てたりするらしいので、やっぱり一般の中で意味がわかることをやらないと駄目だっていう、ものすごく強くなってきてるんですね。専門家だけで話し合いをして、それでOKだっていう話では、もう新しいクリエーション（創造・創作）は起きないっていう。

○柳澤委員：これは文化芸術学術分科会ですな。学術が入ってるんだねえ。

○水越座長：大学は、ちょっと僕にひきつけて言うと、かなり使われたほうがいいですよ。

○柳澤委員：大学は使ったほうがいいですね。学術都市でもあるわけだから。

○八木委員：世界でも、これだけの狭い所に大学が集まっているのは、珍しいようです。

○水越座長：その割にはバラバラなんで。おっしゃった大塚のあたりは、なんとなくあるんだけど、

○柳澤委員：あるんですよね。だけどみんな１つ１つバラバラで。あそこ、めずらしいですよ、あんなにあるのはね。

○内野委員：だってうちの町内ですごいですもん。大塚１丁目でね、跡見あり貞静あり、大学に限らず高校、中学ね。筑波の中高もあるし。

○柳澤委員：放送大学があって、音羽中学もあるしね、あそこは固まってるの。

○水越座長：結局みんな、さっきのコンサートじゃないけど、跡見行く人は跡見に行くし、筑波に行く人は筑波に行くっていうだけで、みんななんだか校門出たらよくわかんないって。地下鉄の入り口に入っていくだけっていう。

○柳澤委員：あれは全部、歴史見ると、陸軍の弾薬庫だったんですね。震災の後にどんどんどんどん、あそこへ行ったんですね。

○楢崎委員：私なんか「あそこの火薬庫に行っちゃいけない」とか言われて土手に、よじ登って中を見ました。火薬庫だったんです。

○水越座長：それをこういうふうに区分けして区分けして、学校に分けていったんですね。

○柳澤委員：だから、どこか北区のほうへ引っ越したでしょ、全部、火薬庫は。その後、全部、学校が来たんですね、震災後。お茶の水は御茶ノ水にあったわけですからね。跡見も表町のほうにあったんですか。

○楢崎委員：そうです、表のほうにあった。奥のほうに筑波大の中学高校が引越ししたんですね。

○柳澤委員：割合、特徴的ですよ、23 区の中でもね。

○長尾委員：都内で土地が空いてた。

○柳澤委員：後楽園に砲兵工廠があって、普天間じゃないけど軍事基地だったんですな、文京区は、明治時代は。

○水越座長：まったくそういうことですよね。だから、そんなに中心的なところでは。区のど真ん中だった「本郷もかねやすまでは江戸の内」って言われて、どっちかっていうと、そんな中心じゃなかったわけですからね。だからかえってそういうものがあったんだと。昔で言うと、郊外に大学が来たようなもので。

今いくつかお話が出てきたかと思うんですけど。繰り返し言うと、１つは僕は、実際、文化祭をやるかどうかっていうことは、ちょっと具体的なとこがいろいろあるかと思いますけど、やっぱりそういう祭りのような空間で一石二鳥、コラボレーションみたいなことをやってくっていうようなお話。それから、その時の鑑賞力の話っていうのがね、片っぽでありますね。一方で、それと関係ありますけど、企業や大学っていうものがどういうふうに参画するか。ただ自分のところでつくってるジュースを提供するとか、大学の先生がなんかお話をするっていうだけじゃない何か、もっと関係の仕方が文化芸術でもあるんじゃないかっていうことがあったかなっていうふうに思います。

ここら辺、ちょっと今日はですね、このぐらいに固まりとして皆さん、何かメモにでもしておいていただいて、少し事務局のほうと僕のほうで、今日、何かグループ化したようなことをですね、まとめて。すごくまとめ上げるというよりも、整理をしておきたいと思います。で、それを参考にしながら次回っていうことになるかと思いますけれども。恐らく次回ぐらいになってくるとですね、今日が多分、一番、一般の市民的な話だったと思うんですね。次回はもう少し行政の一種の委員としての、僕自身が忘れかけてましたけれども、立場に戻って、どういうことを入れてくことができるか。現実的な状況と、それから、やるべきことっていうのをすり合わせるような作業になるかと思いますので、むしろ事務局の方々から、ある程度ご発言もいただきながら、次回以降、この項目を整理してまとめていきたいと思ってます。

前回の会でも話が出てたんですけど、どちらかというとやはり、あまりぼんやりした言葉よりも。「文化豊かな文京区」みたいな話よりはですね、もう少し、例えば大学なんかをかなりしっかり活用して、「なんとかをやるなんとか」とかっていう具体的だったり、ある程度ユニークな言葉が入ってるほうが恐らくはいいんだろうと思いますので、行政との関係で考えるっていうのは、別に一般的な言葉を使うという意味ではないことだと思いますので、そこら辺は次回以降、考えていきたいと思います。

○八木委員：私のほうで少しだけ気になることがですね、生涯学習と非常に密接な関係があるんじゃないかなと思うんですね。生涯学習を延長していくと文化になる場合もあるし、文化にいか

ない生涯学習ももちろんあると思うんですけども。その辺の生涯学習分野とのすみ分けというか関連がひとつポイントかなと思います。それと、今は比較的、先生もおっしゃった、初心者の参加のしやすさというとこまでいったんですけど、確か最初におっしゃったのでは、もうちょっと上のほうというか、トップクラスと言わないまでも、かなりプロというか専門家もまた頂点にはある分野もあるわけで。その最高峰の部分は、全く議論しないことにするか、少し触れていくことにするかっていうのは、あるかもしれないなというのが、私の個人的な感想ということになります。

○水越座長：当然、専門的なものとか、非常に水準の高い文化芸術のことは考えます。それは最終的なものには必ず入れる必要があると思ってますね。ただ、僕の考えでは、すそ野を広げないと高くならないんですよ。すそ野が小さいと、このぐらいしかならない。で、すそ野が小さいと、三角柱みたいなものがあるとすると、非常にとんがったものになるだけで、やっぱり本当に高い水準のものっていうのと、すそ野が広いっていうのは、僕は実は矛盾しないと思ってて。すそ野が広がれば、これは高くなるというふうに思うので、そこは最終的には矛盾のない形でもっていければいいんじゃないかなと思います。

それから生涯学習との関係で言うと、やはり、いわゆる学習という部分がグーッとせり出してくるところっていうのは、これは生涯学習のほうだと思いますね。最終的に何か表現をするとか、モノをつくるとか、みんなでそれについて鑑賞をするとか、このあたりっていうのが学習の成果として出てくることだと思うんですね。生涯学習っていうものの先に出てくる果物とか花とか果実みたいなものっていうのは、やっぱり文化芸術。文化芸術の部分だけもってくると、それは切り花なので枯れちゃうんですよね。やっぱり生涯学習的なとこがないと実は駄目なので、生涯学習そのものは僕らの部分ではないんだけど、さっきおっしゃった鑑賞力のところとか、小学生の中に入ってもらうっていうのが、勉強のためっていうよりも、自分が表現をしたり活動をするために非常に重要だと思うので、そういうプロセスと果物の関係みたいな感じで、生涯学習と文化芸術との関係があればいいかなと。

そこら辺も最終的なところでは。今日は点の話だった、みその話だったんですけど、全体の状況っていうのは次回以降、調整していきたいと。

○八木委員：国際交流も私たちのアカデミー推進部の仕事になってますので、観光と国際交流とスポーツと、それから芸術文化と生涯学習と、５つが文京区のアカデミー推進部の担当業務で、それらの計画を今、立てようということで、皆さんにお願いをしているものになります。

○柳澤委員：外国人を抜きにして、いろんな発展はもうないですね。

○八木委員：だから外国の方に日本の文化を知っていただくっていうのも、またとっても大事なことでありますので、それもまたあると楽しいと。国際交流は国際交流分科会で考えてると思うんですけど、文化は文化の分科会でそれを考えないと、あちらだけには任せているだけでは。で、お互いが考えて、それを皆さんがオープンをすると、またよりいいものができてくる可能性があると思います。

○柳澤委員：根っこのとこで生涯学習が必要で、広がりのところでは国際も必要になるわけで、みんな関係してきちゃうんですね。

○水越座長：文京区に住んでいる東大の留学生の人とか、オブザーバーに連れてきてもいいんですか。

○八木委員：いいんですが、今の取り決めでは「原則論で言うと発言はちょっと」という言い方はしていますけども。

○水越座長：この前の方もしなかったですものね。

○八木委員：その辺、ルールだけはあるんですけども、ただ、逆にオブザーバーではなくて、こちらの分科会で意見を求めたいという合意があれば、それはいけないことではないんではないかなと思われますけども。

○水越座長：国際の部分だけにとんがってやる必要はないかもしれませんが、ある程度僕らのものが形にできたときに、別に外国の人だけじゃなく、意見を聞いてみてもいいのかなという気はしますけど。

○八木委員：この分科会がほかの方をお呼びをするというのは、やってはいけないわけではないですか？

○事務局：今回の協議会の設置要綱の中の関係者の意見聴衆というのがございまして、協議会、分科会が必要があると認めたときは、それぞれ委員会の者および分科会会員以外の者を会議に出席させ、意見を聞き、助言を受けることができるというのがあります。

○八木委員：できるということですね。難しい表現でしたけど、要は、お願いをして、お越しいただけるということですので、皆さんが座長の下で合意があればいいと。ただ、来た人は誰でも発言していいわけではなく、こちらで認めた方だけ発言していただく。こういう流れで、ぜひ、もしいい方がいらっしゃればということで。

○水越座長：そうですね。これは皆さんで考えて。僕はフッと、春日に住んでるタイ人の子とか、日中友好会館に住んでる中国人の子とかもいたものですから浮かびました。それはまたちょっと今度。

○長尾委員：他の４人の座長さんもお集まりになって、途中経過報告をお互いになさったらどうでしょう。

○水越座長：そうしないと不安ですよね。バッチリ同じこと考えられてたらイヤだから。

○長尾委員：全員集まるのは大変だから、座長さんが集まったらどうですか。

○八木委員：そうですね、それもご意見としてちょうだいしまして。

○水越座長：ある程度、少なくともほかのところで何を話してるかを、メモ書きでいいからもらえるとね。

○柳澤委員：同じことを話しても都合悪いし、てんでんばらばらでも都合悪いし、難しい。

○笠井委員：全体会で気まずい思いをしたり。

○水越座長：さて、次回を事務局のほうからご案内いただけますか。

○事務局：第３回につきましては、７月７日、水曜日、本日と同様に午後６時 30 分からで、10 階にあります 1001 会議室で開催します。それと、意見シートにつきましては、５月 26 日水曜日までに、本日の分科会についての意見や感想などございましたら事務局へお願いいたします。以

上です。

○水越座長：それでは繰り返しになりますが、次回は、今日雑談めいたことも含めてバラバラ出たものをある程度整理をしまして、それを基に少し体系的な提言を積み上げるということを皆さんとやっていきたいというふうに思います。次回については、今日までのような模造紙とふせんというようなやり方をしません。まともなといいますか、普通の分科会のやり方でやってこうと。ここまでいろいろ皆さんからワイワイ意見が出ることが僕は非常に重要だと思ったので、次回からは通常の形に戻してやっていきたいと思ってます。

　ということで、ちょっと長引きましたけれども、今日はどうもありがとうございました。